

こんどう 金堂

仏像を安置する建物

桁行7間×梁行4間、基壇（建物の土台部分）の規模は東西34.45m、南北21.98m。

基壇は少しずつ土を積んで叩き締める版築という方法で作られていました。

平安時代中期に倒壊し、平安時代後期に再建されました。その後、鎌倉時代頃には廃絶したようです。

こうどう 講堂

講義を聴いて議論する建物

桁行7間×梁行4間、基壇の規模は東西37.72m、南北20.79m。

金堂よりもやや大きく、他の国分寺と比べて大型の規模です。平安時代の終わり頃に火災に遭い焼失するも、鎌倉時代前半に再建されたことが出土した瓦などから判明しました。

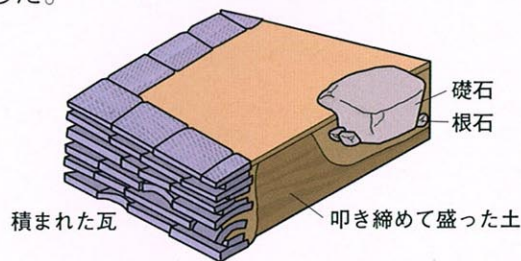
再建された建物は、最終時期である16世紀後葉まで存続しました。

そうぼう 僧房

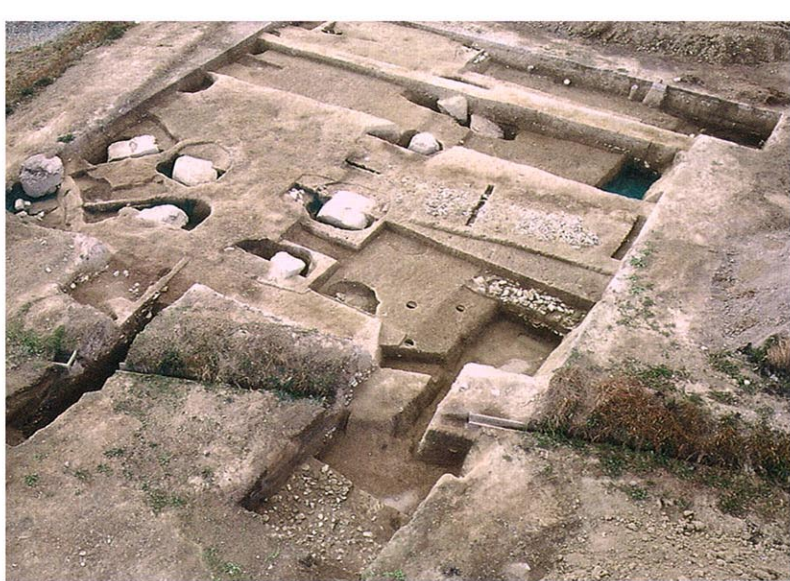
僧侶が生活する建物

建物の詳細な規模は不明ですが、南北6m、東西は64m以上であったと推測できます。

基壇外装の一部が検出されており、瓦を積んで整えていたようです。古代末までは存続しました。



瓦積み基壇の模式図



金堂の北東側の基壇の様子（北東から）



講堂全景（南西から）



僧房西側の瓦積みの基壇（南東から）

工房と寺院

発掘調査では、金属製品に関わる炉などの遺構のほか、羽口や鍛冶滓などの遺物も出土しています。

これらの発見から、建物を維持するために、金属製品の修理などを行う小規模な工房が寺院の中にあったことが分かりました。

◀西側の回廊に造られた炉の跡（西から）